



2014年6月より、ニューヨークの Memorial Sloan-Kettering Cancer Center 胸部外科にてリサーチフェローとして留学させていただいております。指導者である Dr. Adusumilli はインド出身の胸部外科医で、免疫治療 (T-cell 治療) が専門で、臨床と平行して基礎研究を行うラボを持っています。私はこのラボには属さず、ボスの指導のもとで病理医と協力して臨床病理学的研究を担当しています。研究内容としては、第一にラボでの免疫治療に関する基礎研究の臨床病理学的な裏付けをとるような研究が上げられます。具体的には、肺癌、悪性中皮腫における免疫マーカーの発現と予後の相関を調査し、ラボでの基礎研究とのコラボレーションを行うことです。また別に、肺腺癌の形態学的亜分類と予後あるいは画像所見との相関や、microRNA や新たな細胞増殖遺伝子の mRNA 発現調査などのバイオマーカー研究も行っています。

ボスは非常に多忙で、365日仕事をしています。朝は6時半には職場に来ています。また、非常に慎重で、信用されない限りなかなか仕事をいただくことができません。研究に関する知識もコミュニケーション能力もない私がまず行ったことは、ボスよりも早く職場に到着し、土日働くことしかありませんでした。そし

て頼まれた仕事は全力で返すことを繰り返し、次第に少しずつ仕事を与えていただけるようになりました。現在は病期 II, III 期の肺腺癌に関する補助療法の効果と腫瘍微小環境の関連の解明という大きなテーマに向かって動き始めたところです。今のところはデータ収集 (ひたすらカルテから臨床データを収集するのは大変な作業で、症例数が多いので時間がものすごくかかります)、標本整理 (プレパラート、パラフィンブロックの整理) などが主な仕事で、いわゆる基礎研究からはかなりかけ離れた仕事をしています。また、先輩たちが作り上げた膨大なデータベースの管理も任せていただいております。加えて、大変光栄なことに肺腺癌の新分類に関するレビューを執筆させていただくチャンスもいただき、大変充実した日々です。

今回の研究留学とは直接関係ありませんが、こちらで臨床も経験したいという思いがあり、最近 USMLE の勉強を始めました。これはかなり苦痛ですが、徐々に学生時代を思い出し、若返ったような気がして少しだけ調子に乗ってきました。そして、基礎から勉強し直す大きなチャンスであると感じています。

異国の地にありながら、これまでの人生で最も多忙で、最もチャレンジングな毎日を過ごすことができるのは、それをサポートしてくれる家族があつてのことです。なかなかゆっくりと出かける時間もなく、こんな私を許してくれる家族に心から感謝しています。そして、最後になりましたが、激励と暖かな応援をしてくださっている伊藤研一教授、吉田和夫科長をはじめ、外科 2 の皆さん、研究助手・事務の方々、OB の先生方、そして留学支援をはじめ休職中の私に様々なサポートをしてくださっている信州大学医学部に心より感謝させていただくとともに、将来皆様に恩返しができるように、更なる努力をしたいと決意を新たにしております。

(2015年3月)

(信州大学医学部外科学第二教室所属)